

批評は善隣協會調査月報に見えてゐた。だから編輯者の強制に出づるとは云へ、今更茲に本書を紹介するも面はゆき心地がするを禁し得ない。

本書は編者が謙遜して辭書ではなく、單なる語彙に過ぎないと稱するが、世に所謂辭書ではなく、蒐集せる語彙を諸方言に比較研究せる立派なる辭書である。一語を擧ぐれば必ず其用例を示し其語の標準文語に参照し、附するに必要な方言及び出自を以てしたもので、研究的辭書作成の好模範となるべきものである。單なる實用的辭書の類ではない。況んや附するに文語古語の索引を以てして他學者の檢索の便に供したる用意は感謝に堪へぬものがある。

本書の扱ふ方言は支那語の影響極めて大なるものがあるが、著者が云ふ通り古語往々にして存するものあるは注目すべきである。古ハ行音は喉音或は輕唇音として到る所に殘存するを見るが如きがそれである。著者は博覽の識により之を古文獻に對比してゐる。

序論に掲げ出せる著者の参考書目は完備に近くして、大に初學の参考になる。中に就いて、華夷譯語は瀟芬樓秘笈本と東洋文庫本とを擧げて大同小異なるを注してゐる。正に其通りであるが、序でを以て及べば、この東洋文庫本に續増等の部を増加したものが柯鳳孫藏本であるので、瀟芬樓本東洋本柯氏本の轉展添加の迹をたどり得るのである。至元譯語は事林廣記收載する所である。登壇必究及び武備志に收載する北虜譯語にも涉つてゐるが餘り利

用しなかつたらしい。武備志に載する譯語は二種あつて、第一種は登壇必究所收と同じであり、第二種は著者が推定せる如くボズドネエフ蒙古文學史に載する所のものである。たゞ武備志の方が少し錯簡と誤脱がある様だ。

我國に於ける蒙古語學は今方に時運に促されて飛躍せんといつある。従つて其根柢となるべき研究が極めて必要である。我國に於て此書の如き方言辭書が續出せん事を期待したい。

(石濱純太郎)

ゴルツ獨逸農業史 一十九世紀一

山岡亮一譯

昨一九三七年、吾々はドイツ農業史に關するフォン・ペーロウの遺稿がリュトゲ教授の監輯によつて發表された喜びを有つことが出來たのであるが(本誌第二十三卷第四號紹介欄参照)、今また故ゴルツ教授の農業史の一部が本學經濟學部講師山岡亮一氏の數年の苦心によつて吾々の言葉に移されることが出來たのを見て、喜びの念を禁ずることが出來ない。

原著 Theodor Freiherr von der Goltz: Geschichte der deutschen Landwirtschaft, 2 Bde. (1903-1903) の取扱ふところは、先づ第一卷に於いて、原始時代より十八世紀末に至るドイツ農業史、次いで第二卷に於いて、十九世紀初頭より一八八〇年に至るまでのドイツに於ける農業上の諸種の變革並びに農學の發展であるが、本譯書はその中の第二卷を全譯したものに他ならない。

譯者の序にある如く、「ゴルト教授の農政學が我國に紹介せられたのは一世代以前のことである。……その後我國の農政學研究がゴルトから受けた恩惠の深さは測り知れぬものがあらう。しかしながら今日では我國農業經濟學も諸々の一般經濟理論の洗禮を通過して長足の進歩成長を遂げてゐる、従つてもはやゴルトの政策論から新しい學び取るべき何物もないと迄極言する人もあらう。だがこのことは決して彼の農業史が一顧にも値ひせずとの推論に導くものではない。……經濟史中でも特にその取扱の困難なる農業史を二巻中に収めて餘すところなきは全く驚嘆に價する。」

本譯書(原著第二卷)の取扱ふ内容のうち特に吾々にとつて興味ある部分は、第一章「十九世紀前半に於ける農業改革」の第二・三節及び第二章「自然科學の主要影響下に於ける農業のその後の發展」の第三節であらう。

先づ、第一章の第二節「農業法制的改革」(一四九—一八三頁)に於いては、シュタイン・ハルデンベルヒの改革に始まり一八四八年の三月革命前後の時期に至るまでの非常に多くの農業に關する諸法令が取上げられ、主としてプロシアを中心にその立法の経緯並びにその効果が縷説せられてゐる。次いで同じ章の第三節「農民人口内部に於ける變化並びに新構成」(一八四—二四二頁)に於いて、前節に述べられた農業上の諸立法と相互に不可分に絡み合つてゐる農村人口の新しい階級構成が大土地所有者・農民・農業労働者等に分つて論じられてゐるのであるが、これは云はゞドイツの

資本主義の發達を農業の部門に於いて跡づけたものに他ならないであらう。それは、ドイツ農業史に於ける最も重要な所として興味深い一節をなしてゐるのであるが、本書の重心の一つもまた、この部分に置かれてゐると考へて差支ないやうに思はれる。

然しながら、また他面から考へると、農業經營の實際的な方面或は技術的な問題に就いて殆ど知識を有たない吾々に對して最も教へるところの多い部分は、むしろ第一章の第四節「農業經營の改善」(二四三—三〇九頁)並びに第二章の第一・二節に含まれてゐると云へるかも知れない。こゝに於いては、農業の經營方式の變化や農耕・畜産・副業經營に於ける技術的な諸問題、或はそれらが農業收益に及ぼす影響、更にユヌストゥス・リービヒによる農學の自然科學的基礎づけ等が取扱はれてゐるのであるが、吾々に最も不足してゐる此の方面の知識を吾々はそこから多く汲みとることが出来るであらう。

著者ゴルト教授の云ふ如く、農業史は國民の歴史と密接不可分の聯關を有つ。民族移動期や封建制度時代の社會構造が農業組織や農民生活に就いての深く正しい知識なしには眞に理解されることの不可能なことは云ふまでもないが、例へば農民戰爭の如く農民自身が歴史の舞臺に主役を演ずるやうなことがない場合にも、すべての歴史事件の背後には常に農民が立つてゐると云へるであらう。このことは、また、資本主義成立期以後の歴史に就いても現代に於いても妥當する。フリードリヒ大王の政治にしても、一八四八年の革命の特殊性にしても、ビスマルクの新帝國の成立

にしても、ヒットラーの政權獲得にしても、ドイツ特にエルベ以東ドイツの農業組織及び農民階級の問題に盲目であつては、眞に理解されることは出来ないであらう。特にナチスの支配に於いて「土地」の問題に特殊な重要性が見出されそして「エンケル」的土地所有がまた新しい意味を有ち始めた現代に於いては、ドイツの農業の歴史は再び検討さるべき充分の理由を有つてはゐないであらうか。

こゝに原著の第二卷の流麗な邦語に移されたのを手にして、吾々は、原著第一卷即ち古代末期より十八世紀末に至るドイツ農業史が吾々の言葉で表現される日の一日も近からんことを切望して已まないものである。(菊版四六四頁、東京、有斐閣發行、定價四・〇〇)〔中山〕

ホツプス(西哲叢書 VIII)

重松 俊 明著

ヒューム(同)

土井 虎 賀 壽著

昭和丙子二月、蒙昧主義滔天の濁流に理性の覆没を免れその光明を喪失せざらんがため、田邊元教授監修のもとにその企劃を發表せる西哲叢書三十餘卷は、爾來二ヶ年餘にして内十七卷を既刊し、略々所期の目的を達成するに幾く、この國の知識人達に妙なからず密與しつゝあるは、洵に讃ふべく亦歡ぶべき事實と云はねばならない。而して、此の叢書の裡に纂められた三十有餘の先哲は、

夫々の時代に夫々の思想を代表しヨーロッパの歴史に於ける知性の發展を顯證するものであつて、此處に紹介するホツプス(Hobbes) ヒューム(Hume)の二哲人が共にイギリス經驗論の代表者たる事は更めて冗説するまでもなからう。併し、イギリス經驗論を代表するものは何もこの二人に限つたわけのものではない。先驅者R・ベーコン、オツカムを別とするも、我々はF・ベーコン、ロツク、バークレイの名を逸するわけにはいかない。だが、今該叢書がF・ベーコンを繼承するホツプスと、その究竟に於てロツク、バークレイを徹底せんとするヒュームとを以て特にイギリス經驗論を代表せしめんとするも、限られた冊子を考慮に入れるならば蓋し止むを得ない事であらう。

一六四二年の Cromwell 革命、四九年のチャールス一世處刑に續く共和政の實施、六〇年の王政復古、八八年の名譽革命。イギリス近代國家成立のための變革と反動のこの狂瀾怒濤期こそ將にホツプス哲學の歴史的背景をなすものであつた。一方に於て王權擁護者を見做され身の危険を感じて巴里に亡命したホツプスは、他方に於ては「彈からぬ無神論者」として王黨側の指彈を甘受するを餘儀なくされた。成立期の避くべからざる二重性の裡に而も名譽革命を識らずして逝つたホツプスは、「保守的な傳統的絕對主義と進歩的な革命的な個人主義との、全く相對立する思想」をそのまゝ一つに結合してゐた。「こゝに彼の特異な思想の深刻さと獨創性とが認められると同時に、多くの無理と破綻とが包藏さ